

一九世紀末・二〇世紀初頭における スロヴァキア・ナショナリズム運動の諸潮流

井出 匠

はじめに

ハプスブルク君主国を構成する一領域であったハンガリー王国は、言語的多数派であるマジャール系住民と、同じく少数派であるスロヴァキア系、セルビア系、ルーマニア系などの住民からなる、多言語国家であった。しかしながら、一八四〇年代に台頭した自由主義的改革勢力は、ハンガリーの近代的ネーション・ステート化のための統合理念として、「ハンガリー＝マジャール・ネーション *magyar nemzet*⁽¹⁾の単一不可分性」という原則を掲げる。これにより、ハンガリーにおいて政治的ネーションとして存在するのは唯一「ハンガリー＝マジャール・ネーション」のみで

あり、国家公用語としてはマジャール語のみが認められる、とされたのである。そして、ハンガリーではこれ以降、行政・教育分野におけるマジャール語使用の促進——「マジャール化」が押し進められていく。この統合プロセスは、ハンガリー自由主義派がオーストリア皇帝政府からの独立を目指した一八四八年革命運動の挫折により一時的に中断するものの、やがて一八六七年のオーストリア＝ハンガリー二重制成立により復活する。⁽²⁾

本稿で取り上げるスロヴァキア・ナショナリズム運動は、「ハンガリー＝マジャール」国家理念および「マジャール化」にたいする、一種の対抗運動として発生した。その目標とするところは、「ハンガリー＝マジャール・ネーション」に包摂されない独自の「スロヴァキア・

ネーション」Slovenský národの確立、そしてそれに必然的に具わるべき政治的・文化的諸権利の獲得であった。聖俗の教育エリート層を中心とするこの運動は、一八四八年革命期および一八六〇年代にとくに活発となったが、一九世紀末にひとつの転機を迎える。その端緒となったのは、運動における唯一の政治党派であったスロヴァキア・ネーション党 Slovenská národná strana が、一八八〇年代後半にハンガリー王国議会選挙への参加をはじめとする政治活動を断念し、いわゆる政治的消極主義へと転向したことである。この結果、スロヴァキア・ネーション党の消極主義に批判的な新たな諸潮流が、一九世紀末にスロヴァキア・ナシヨナリズム運動の内部に出現することとなる。

その後、これらの諸潮流は、ときには互いに提携し、さらにまた対立するなどしながら、最終的にはオーストリアーハンガリーの解体によって成立するチェコスロヴァキア第一共和国へと引き継がれていく。すなわち、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての世紀転換期は、大戦間期のスロヴァキア系諸政党の原型となる政治的諸潮流が最初に形成された時期であった。本稿では、こうした諸潮流に焦点を当て、その理念や運動方針の比較分析を試みる。

以下本稿で取り上げるのは、①スロヴァキア・ネーション党のイデオログであったS・フルバン²ヴァヤンス

キー、②スロヴァキア・ネーション党に批判的な青年知識人グループであるフラス派 Hlasaj, ③聖職者を主体とするカトリック系ナシヨナリスト・グループである。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのスロヴァキア・ナシヨナリズム運動の状況については、これまでも一定の研究蓄積がある^③。ただしその多くは、スロヴァキア・ネーション党またはフラス派に焦点を当てたものであり、カトリック系ナシヨナリストについては、その重要性にもかかわらず等閑視されている感がある。そこで本稿では、前二者との比較においてカトリック系ナシヨナリストにも言及し、スロヴァキア・ナシヨナリズム運動におけるその役割について論じる。

一、スロヴァキア・ネーション党と

S・フルバン²ヴァヤンスキー

一八九〇年代半ばの時点で、スロヴァキア・ナシヨナリズム運動における唯一の党派であったのが、一八七〇年代初頭に形成されたスロヴァキア・ネーション党である。同党は、一八四〇年代半ばから革命期にかけてスロヴァキア・ナシヨナリズム運動を主導した福音派知識人グループ（その指導者の名を取り「シトウール派」と呼ばれる^④）の

流れを汲み、運動のいわば「本流」であった。同党の設立当初の目標は、二重制の成立に先立つ一八六二年にハンガリー王国議会および皇帝に提出された『スロヴァキア・ネーションのメモランダム』*Memorandum národa slovenského* において示された、北部ハンガリー（スロヴァキア系住民が多数派を占める地域）における領域的自治の獲得であった。⁽⁵⁾ この要求の基本にあったのは、シトゥール派から受け継いだナショナリズム思想——言語的エスニック集団としてのスロヴァキア人は、独自の「スロヴァキア・ネーション」として政治的権利（自治権）の集合的主体となりうるという考えであった。すなわち、ハンガリー王国内における独自の政治的ネーションとしての「スロヴァキア・ネーション」の確立こそが、スロヴァキア・ネーション党が究極的に目指していたものであった。

しかしながら、スロヴァキア・ネーション党は実質的には福音派系の教育エリート層を主体とする小グループにすぎず、上記の目標を実現するだけの政治的活力も、また社会的基盤も殆ど持たなかった。同党の機関紙として『ナードニエ・ノヴィニ』*Národné noviny* が、北部ハンガリー中央部の小都市トゥルチアンスキ・スヴェティー・マルティン（以下マルティン）から発行されてはいたものの、その購読者数は多くはなかった。⁽⁶⁾ 実際のところ、同党

の一般民衆、とくにその大多数を占める農民層にたいする政治的影響力は、ほぼ皆無に近いものであった。

その証拠に、スロヴァキア・ネーション党は一八七二年以降数回にわたりハンガリー王国議会選挙に参加したにもかかわらず、議席を獲得することはおろか、一定数の候補者を用意することにも苦心した。⁽⁷⁾ この結果、同党の指導部は一八八四年の王国議会選挙への参加を断念し、政治活動から撤退する決定を行った。『ナードニエ・ノヴィニ』紙上にて公表された声明によれば、その公式の理由は、ハンガリー王国の政権党である自由党 *Szabadelvű Part* 政府によるスロヴァキア・ナショナリズム運動への弾圧にたいする、抗議表明であった。⁽⁸⁾ 自由党政府は実際に、スロヴァキア系やルーミア系など言語的少数派のナショナリズム運動にたいして強硬な態度で臨み、その文化的活動までも厳しく規制していた。⁽⁹⁾ しかし、スロヴァキア・ネーション党が政治活動を断念せざるをえなかった最大の理由は、スロヴァキア・ナショナリズム運動にたいする一般民衆の無関心にあった。『ナードニエ・ノヴィニ』のある論説は、こうした無関心の原因を民衆層の「ネーション意識」*národné povedomie* の欠如に求め、したがって「民衆の中のネーション意識を目覚めさせる」ことが、運動にとっての当面の目標となるとした。⁽¹⁰⁾

こうしたなかで、政治活動そのものに否定的な文化ナシヨナリズムを唱え、スロヴァキア・ネーション党の指導的イデオログとして台頭したのが、S・フルバン¹¹ ヴァヤンスキーである。シトウール派の指導者のひとり J・M・フルバンの子であるヴァヤンスキーは、マルティンを拠点として『ナードドニエ・ノヴィニ』をはじめとするいくつかのスロヴァキア語新聞・雑誌の発行に関わったほか、作家として数多くの詩や小説、評論を発表した。スロヴァキア・ネーション党の指導者のひとりとして、政治的消極主義への転向に主導的役割を果たしたのも、このヴァヤンスキーであった。

ヴァヤンスキーの思想については民俗文化の称揚や親ロシア主義、「政治的メシアニズム」などの諸側面が挙げられているが、その基本にあるのは非政治的な文化ナシヨナリズム¹²である。以下では、『ナードドニエ・ノヴィニ』に掲載された若干の論説記事および、ヴァヤンスキーのナシヨナリズム思想が端的に示されているとされる著作『霧囲気と展望』*Náklady a vyhlady* (一八九七年刊) から、かれの非政治的・文化的ナシヨナリズムについて検証する。ヴァヤンスキーは、一八八二年の「文学とネーション」*Literatúra a národ*と題する論説において、以下のように述べている。

スロヴァキア人は、(…)やはりネーション *národ* なのである。なぜなら、かれらはネーション性 *narodnost* を有するからであり、自らが耕し、守ってきた土地に固く結びつけられているからである。かれらは、自らの言葉、習俗、考え方、歌、神話、名、感覚、独自のスロヴァキア的な生活、家族性、愛情を有しているのである。¹²

さらに、同じ年の別の論説「芸術とネーション性」*Umenie a narodnost* においては、スロヴァキア人の「ネーション性」を支えるものとして、とくに民衆的な音楽と詩が挙げられている。¹³ これらの論説からは、ヴァヤンスキーがネーションの地位を要求しうる住民集団に具わるべき要件として重視していたものは、言語、習俗、文学、民衆芸能などに体现される固有の精神性、換言すれば共通の文化的コードであったことが窺える。もちろん、このような言語・文化的要素を基盤としたネーション理念自体はけっして新しいものではなく、シトウール派を含めヘルダーの影響を受けた東中欧のナシヨナリズム思想にはごく一般的に見られた。ただし上に述べたように、シトウール派の掲げた要求が自治権の主体としての政治的ネーションの確立を視野に

入れていたのにたいし、ヴァヤンスキーのネーション理念には、シトゥール派のそれに含まれていた政治的要素を見出すことはできない。そこにはむしろ、スロヴァキア・ネーション党の政治的消極主義を正当化する必要性から、政治的要素を積極的に排除しようとする意図が認められるのである。

ヴァヤンスキーのこうした脱政治志向は、『ナーロドニエ・ノヴィニ』に連載された論説をまとめて一八九七年に刊行された小著『雰囲気と展望』に明確に示されている。その冒頭におけるヴァヤンスキーの主張は、次のように要約される。——スロヴァキア・ネーションの存立は、歴史的に把握できる以前の非常に古い時代に遡ることができ。しかし時を経るにつれ、他のスラヴ系住民との混交が進み、その純粋さは失われていった。したがってスロヴァキア人は、現状においてはナショナルな自意識を十分に有していない。ただし、その内部にはネーションたりうる全ての要素を秘めており、その覚醒に向けた努力がなされなければならぬ⁽¹⁴⁾。

こうした前提に立つヴァヤンスキーは、続く各章で一九世紀初頭以来のスロヴァキア・ナショナリズム運動の概要を述べた上で、以下のように結論づける。

(…) しかし何にも代えがたいものは、我々自身によって証明されるスロヴァキア・ネーションの個性 *individualita* であり、厳しい環境において積み重ねられ、蓄えられたその精神的資本であり、聖なる、〔世俗的な〕法の規定によらない独自のナショナルな生活 *narodny život* である。そこでは、政治も、パトリオティズムも、権力も、策略も、また弁証法も、何も為しはしない。(…) 私は、スロヴァキア・ネーションの独自性、既に結晶化したその精神的世界、そしてその存立の権利という三点の中に、妥協も、また要求も見出しはしない。

妥協や要求は、党派や党派間闘争に関わるものである。我々ハンガリー王国のスロヴァキア人は、党派ではなく、ネーションである。(…) 我々は党派ではなく、有機的全体 *organicky celok* である。それゆえに我々の家は、多彩な精神的体系のための十分な広がり⁽¹⁵⁾を有するのである。

要するにヴァヤンスキーによれば、スロヴァキア・ネーションという実体が遠い過去の時代から現在にかけて間断なく存在しているという事実には疑いの余地がないのである。それは精神文化の領域において証明されるのだとい

う。そして、ネーションというものがあくまで精神文化的実体である以上、それを「政治的」実体として確立する必要性は存在しない。したがって、領域的自治の要求や王国議会選挙への参加といった「党派」的政治活動、またそれに付随する政治的駆け引きや戦術は、スロヴァキア・ネーションの存立とは何ら関わりがない。むしろ重要なのは、スロヴァキア民衆の中に潜在する「ネーション意識」をいかにして覚醒させ、ナショナルな精神性を守り抜いていくのか、という点である。ただしその具体的方法については、ヴァヤンスキーは何も述べていない。ヴァヤンスキーの叙述の特徴はその抽象性・観念性にあり、何らかの目標を実現するための具体的方策が示されることはなかった。

ヴァヤンスキーのこうした観念的な思想および叙述方法は、政治的実践を放棄し文化保守主義的な方向性を選択したスロヴァキア・ネーション党の内部事情に適合するものであった。すなわち彼の言説は、同党の方針転換を正当化する役割を担うものであった。

こうして、スロヴァキア・ネーション存立の内的な担保としてナショナルな精神文化の保持を強調したヴァヤンスキーが、同じく外的な担保として掲げたのが、スラヴ世界の盟主としてのロシアの存在である。ヴァヤンスキーは、つとにロシア文学の翻訳やロシア知識人との精神的交流を

奨励していたが、こうした文化的領域におけるロシアへの接近が、最終的にはロシアによるスロヴァキア・ネーションの解放に帰結すると考えていた⁽¹⁶⁾。ヴァヤンスキーのこうした親ロシア主義の背景としては、個人的な趣向やロシアおよび中欧におけるパン・スラヴ主義の影響もさることながら、一八七七年の露土戦争の影響が考えられる。すなわちヴァヤンスキーは、同じ「スラヴ・ネーション」であるセルビア公国とモンテネグロ公国のオスマン・トルコにたいする戦いにロシアが介入して勝利し、結果として両公国のトルコからの独立を勝ち取った一八七七年の露土戦争に、ロシアによる諸「スラヴ・ネーション」の解放の理想を見ていた、とされるのである⁽¹⁸⁾。彼の親ロシア主義が、「政治的メシアニズム」と評されるゆえんである。

しかしながら、ヴァヤンスキーのロシアにたいする期待は具体的展望に欠けるところがあり、上述の文化保守主義と同様、スロヴァキア・ネーション党の政治的消極主義のための弁明とも受け取れる。そして、スロヴァキア・ナショナルリズム運動の「本流」たる同党の、こうした思想的硬直化、保守化、政治的実践からの逃避に批判的な潮流が、やがて一八九〇年代半ばより台頭してくることとなる。

二、フランス派

スロヴァキア・ネーション党の消極主義にたいして批判的な立場をとったスロヴァキア系知識人のグループとして最も重要なものが、本節で取り上げるフランス派である。その名称は、一八九八年に発行が開始された雑誌『フランス(声)』*Hlas*に由来する。その編集の中心となったのは、いずれも医師であったV・シロバールと、P・ブラホであった。『フランス』には、シロバール、ブラホ、そして後述するM・ホジャなど、比較的若い世代のスロヴァキア系知識人が多く寄稿し、その中からは戦間期のチェコスロヴァキア共和国における重要な政治家が輩出した。⁽¹⁹⁾

フランス派と、スロヴァキア・ネーション党の理念上の隔たりは、前者に多大な思想的影響を与えたチェコの哲学者T・G・マサリク(後のチェコスロヴァキア共和国初代大統領)と、後者のイデオログたるヴァヤンスキーとの、ナショナリズム運動の方向性をめぐる見解の相違に由来するところが大きい。マサリクとヴァヤンスキーは、当初は友好関係にあったものの、後にはとりわけロシアへの態度をめぐる深刻な対立が生じた。すなわち、上で述べたヴァヤンスキーの親ロシア主義にたいし、マサリクはロシアの

いわゆる「スラヴ派」のパン・スラヴ主義に批判的な態度を表明し、それが両者の決裂を招く結果となったのである。⁽²⁰⁾ ロシア社会を「西欧のどの社会よりもはるかに発展し、自由な綱領の上に成り立っている」とみなし、ロシアによるスロヴァキアの解放を待望していたヴァヤンスキーにとって、「西欧的な」近代合理主義に基づくマサリクのロシア批判は受け入れ難かった。また、マサリクはスロヴァキアのナショナリズム運動をチェコのそれと一体と考へ、実際に若い世代のスロヴァキア系知識人に少なからぬ影響を及ぼしていた。このことが、「スロヴァキア・ネーションの独自性」に固執するヴァヤンスキーの目には、重大な脅威と映ったのである。⁽²¹⁾

ヴァヤンスキーと袂を分かったマサリクの影響を最も強く受けたのは、プラハにおいて「デトヴァン」*Detvat*と称するサークルを形成していた若いスロヴァキア系知識人のグループであった。その一人であったシロバールの回想によれば、かれらは当初ヴァヤンスキーの影響下にあり、ロシアのスラヴ主義者N・ダニレーフスキーの著作を主たる研究対象としていた。⁽²²⁾ しかし、やがてかれらはマサリクに傾倒し、その指導のもと一八九八年に雑誌『フランス』を創刊した。それに先立ち、マサリクとシロバールらは新たな雑誌の内容について協議した。そして、ハンガリーの言

語的少数派問題、「マジヤール化」にたいする批判、民衆の経済状態の改善策、スロヴァキア・ネーション党の親ロシア主義・政治的消極主義にたいする批判、具体的な政治プログラムの提示（普通選挙制の導入、累進課税、司法改革、行政改革など）といったテーマを取り扱うことが決められた。⁽²⁴⁾

『フラス』は、チェコ（オーストリア領モラヴィア）との境界に程近い、スロヴァキア地方西部の町スカリツアを発行地として、月一回刊行された。編集主幹は最初ブラホであったが、一九〇二年に意見対立から辞任し、シロバールが取って代わった。⁽²⁵⁾ その際、発行地はシロバールの地元ルジヨムベロク（スロヴァキア地方中央部の町）に移り、一九〇四年に資金難で終刊した。

フラス派の基本的主張は、スロヴァキア・ネーション党が放棄した政治的実践、すなわち一般民衆の支持を獲得する取り組みへの回帰であった。ただしこの場合、かれらの念頭にあったのは、政党の結成や請願運動、選挙への参加といった直接的な政治行動ではなかった。その前段階として、青年知識人による教育・啓蒙活動を通じて一般民衆の精神・物質両面での向上を図り、ナシヨナリズム運動の浸透のための社会的基盤を築いていく必要性が論じられたのである。この取り組みは、「大きな」事業である直接的な

政治行動との対比で、「小事業」*drobná práca* と呼ばれた。これについて、シロバールは『フラス』創刊号の巻頭論説「我々の努力」で以下のように述べている。

（…）我々が現実的に政治活動を行うためには、まずは多くの「非政治的」活動を遂行する必要がある。それはまさに、道徳、啓蒙、そしてナシヨナルな農業経済の分野における、小さな、「栄誉なき」活動である。それゆえ、我々の考えでは、スロヴァキア人のもとの政治的活動とは、隣人の道徳的・教育的向上や物質的福利の保障のために我々が単独で遂行する、あらゆる活動を意味する。そこから導かれるのは、我々の一部の「政治家」たちが全ての社会的貧困や墮落からの解放者とみなしているところの、いわゆる「高度の政治」や外国の偶然的策略によるいかなる救済も、我々は期待しないということである。⁽²⁶⁾

ここで言及されている「政治家」たちが、スロヴァキア・ネーション党を指すことは明らかである。要するにシロバールは、ヴァヤンスキーらの抱くロシアによる「救済」という非現実的な期待にたいし、民衆の社会的状況の改善を視野に入れたフラス派の方向性を、より現実的なも

のとして対比させているのである。シロバールはさらに、同じ論説で「チエコスロヴァキア・ネーション」československý národの文化的一体化を促進する必要性を論じ、マサリク流のチエコ・スロヴァキア協調主義に立つことを明確にした。⁽²⁷⁾これはすなわち、シトウール派からスロヴァキア・ネーション党に引き継がれた伝統的な「スロヴァキア・ネーション」理念の否定につながるものでもあった。

フラス派の掲げる「小事業」のより具体的な内容については、『フラス』初年度版第一号掲載のブラホの論説「青年と小事業」が明らかにしている。⁽²⁸⁾ブラホによれば、「小事業とは、分業の原則に従った、広範な民衆層の生活のあらゆる領域における活動を指す」とされる。そこには、民衆の利益になるあらゆる産業活動、成人を対象とした識字教育、「マジヤール化」教育を受けた若者にたいするスロヴァキア語正書法の教授、家庭内教育、協会・サークル・社交クラブの設立、民衆を対象とした講習会の開催、定期刊行物・冊子・暦・書籍等の普及および民衆向け図書館・読書サークルの設立、信用組合・食料品組合・小売組合・農業協同組合の設立など、多岐にわたる活動が含まれる。これらは全て、直接的な政治行動において民衆の支持を獲得するための下地となるべき事業であるとされた。このことについて、ブラホは以下のように述べている。

(…) 小事業の遂行いかんによって、我々のもとでの選挙は成功も失敗もする。町村自治体 obec における小事業は、町村自治体、あるいは郡、県、場合によってはさらに大きな枠組みにおける、我々の力の条件となる。

自治体や都市における小事業の先行なくしては、政治的な成功について考えを及ぼすことさえ不可能なのである。⁽²⁹⁾

フラス派はこのようにして、スロヴァキア・ネーション党の消極主義を批判し、それとの違いを際立たせるため、「小事業」に積極的に取り組むべき、とする主張を行った。フラス派に関する従来の研究では、主としてこの差異に焦点が当てられてきた。たとえば、社会主義体制期の政治史家 J・ブトヴィンはフラス派の意義について、スロヴァキア・ネーション党の保守主義・消極主義によって停滞していたスロヴァキア・ナショナリズム運動に新たな展開をもたらし、活性化を促したと評している。⁽³⁰⁾また、近年のフラス派研究の第一人者である R・クロブツキーは、よく知られたナショナリズムの二分法、すなわち「言語的・文化的ナショナリズム」と「政治的・領域的ナショナリズム」の

理念的対立を念頭に、前者をヴァヤンスキーに、後者をフランス派に代表させている。⁽³¹⁾ クロブツキーによれば、「スロヴァキア・ネーション」を精神文化的実体ないし有機的統一体とみなしたヴァヤンスキーの「言語的・文化的ナショナリズム」にたいし、フランス派のコンセプトは「政治的・領域的ナショナリズム」に分類される。なぜならば、フランス派は経済・社会・教育の領域における組織活動を通じたナショナリズム運動の民主化・大衆化を目指し、スロヴァキア民衆が「政治的ネーション」を成立させるための条件作りを行おうとしたからである。クロブツキーによれば、「政治的・領域的ナショナリズム」においてはナショナル・アイデンティティを自覚的・主体的に構築していく取り組みが重要であり、フランス派の「小事業」理念も、こうした主体的なネーション形成事業の一環と見なしうる、とされる。⁽³²⁾

こうして、スロヴァキア・ネーション党の消極的待機主義にたいしてフランス派の積極的行動主義を、前者の「言語的・文化的ナショナリズム」にたいして後者の「政治的・領域的ナショナリズム」を対置させる二極対立構造は、たしかに理解しやすい。ただ、この対立構造は、スロヴァキア・ネーション党およびフランス派の双方の当事者たちが、言説レベルにおいて意図的に作り出したものであることに

注意する必要がある。そこで、こうした当事者的な見方を離れ、両者に共通する客観的特徴をあぶり出す必要があるだろう。

スロヴァキア・ネーション党が消極主義に転じた要因のひとつが、民衆層のスロヴァキア・ナショナリズム運動にたいする無関心にあったことは既に述べた。ただし、ヴァヤンスキーの著述においても明らかのように、かれらは民衆層への関心を失ったわけではなかった。ヴァヤンスキーにとって、民衆層がスロヴァキアの「ネーション性」を保持していることは自明であり、その中に潜在する「ネーション意識」を呼び覚ますことの重要性は、依然として強く認識されていた。ただ、その具体的手段について論じられることはなく、ロシアへの漠然とした期待感がそれを補っていたのである。

一方のフランス派も、民衆層への働きかけを重視していた点では、ヴァヤンスキーと同じである。ただし、そのための具体的方策——「小事業」を提示し、その実行を呼びかけた点において、かれらはヴァヤンスキーとは対照的であった。では、フランス派のこうした社会実践重視の姿勢は、実際にスロヴァキア・ナショナリズム運動の活性化をもたらしたのであろうか。フランス派をスロヴァキア・ネーション党との対比において論じるならば、この点もまた問

われねばならない。

フラス派に見られるような、民衆層の教育水準、経済的自立や福利向上の促進が結果的にナシヨナリズム運動への支持に結びつくとする考えは、じつは上述のシトゥール派以来、スロヴァキア・ナシヨナリズム運動において繰り返されてきたものである。ヴァヤンスキーもまた、民衆啓蒙の必要性自体は認識していた。⁽³³⁾ただ、スロヴァキア・ネーション党には、それを実行に移すだけの人的資源も、また組織的基盤も欠けており、あくまで将来的な行動目標にとどまるものであった。⁽³⁴⁾

そして、フラス派の運動もまた、自らの掲げた「小事業」を十分に展開するだけの大衆的広がりを持つものとはならなかった。⁽³⁵⁾スロヴァキア・ネーション党が主として『ナードニエ・ノヴィニ』周辺の知識人コミュニティから成り立っていたのとまさに同様に、フラス派は『フラス』を中心とするごく限られた青年知識人のコミュニティによって形成されていた。『フラス』の発行部数は当初六〇〇から八〇〇、一九〇二年に編集体制が改められた後には四〇〇程であり、『ナードニエ・ノヴィニ』と大差なかった。⁽³⁶⁾「小事業」の実践の例としては、ブラホがスロヴァキア西部地方で消費協同組合や製乳協同組合など四〇余りの協同組合の運営に関与し、ある程度の成功を収めた

ことが挙げられる。⁽³⁷⁾ブラホのこうした活動は、彼が一九〇六年および一九一〇年の王国議会選挙において当選を果たす要因になったものと考えられ、その意味でブラホはフラス派の理想を体現する存在であった。しかしこうした成功はむしろ例外的であり、その民衆志向や実践主義的プログラムにもかかわらず、フラス派のスロヴァキア民衆への影響はごく限定されたものであった。まさにこの点において、フラス派とスロヴァキア・ネーション党の間には大きな差異は存在しなかったのである。

三、カトリック系ナシヨナリスト

こうして一九世紀末当時、スロヴァキア・ナシヨナリズム運動の旧世代を代表するスロヴァキア・ネーション党も、また新世代を代表するフラス派も、農民を主体とする民衆層への浸透を果たせぬままにいた。一方これとは対照的に、この時期新たに結成され、ハンガリーの農民層の幅広い支持を獲得しつつあった政治勢力が存在した。カトリック系の全国政党、カトリック人民党 *Katolíkus Néppárt* である。⁽³⁸⁾

カトリック人民党は、自由党政権による一連の教会関連立法（市民婚・戸籍登録の世俗化・諸宗派の同権）に反対

するカトリック貴族や聖職者によつて、一八九五年に設立された。ローマ教皇レオ一三世の回勅『レールム・ノヴァールム』(Rerum novarum, 一八九一年)⁽³⁹⁾において提唱された社会的カトリシズムをイデオロギー的基盤とするその政策プログラムには、農民や労働者、小規模自営業者の大資本からの保護に加え、際立つた反自由主義・反ユダヤ主義が掲げられていた。そして、カトリック聖職者による信用組合や生活協同組合の設立などの社会組織活動を通じて、とくに農民や手工業者の間に支持を広げていった。カトリック信徒が住民の約七割を占める北部ハンガリーにおいては、同党のスロヴァキア語機関紙『クレスチャン』Kresťan⁽⁴⁰⁾が支持の拡大に貢献した。その結果、カトリック人民党は同党にとつて最初の国政選挙となる一八九六年のハンガリー王国議会選挙において一八議席(うち北部ハンガリーでは五)、一九〇一年の同選挙においては二三議席(同一一)を獲得した。

こうしてカトリック人民党は、シトゥール派からフランス派に至るスロヴァキア・ナシヨナリズム運動の唱導者たちが望みつつも果たせなかつた課題、すなわち社会組織活動を通じた民衆層の支持獲得を実践してみせたのである。それが可能になったのは、地域社会のカトリック信徒と日常的に接することによつてその実情をよく把握し、信徒間に

おいてなお多大な影響力を有していた、教区司祭や助祭などの聖職者の努力によるところが大きかつた。⁽⁴¹⁾ フラス派に近い立場から出発し、後に農民運動の指導者となるM・ホジャは、『フラス』に掲載した論説において、この現象を次のように分析している。

(…) 人民党は、我々の民衆の性質を把握し、瞬く間にその心と考えを支配してしまつた。それまで死んでいた民衆は、経済的自助の魔法の杖によつて目覚めさせられ、キリスト教社会主義的な示唆によつて焚きつけられ、(スロヴァキア) ナシヨナリストの驚きをよそに、まるで催眠術をかけられたかのように、ハンガリーの保守主義と再生した封建主義に引き寄せられてしまつた。⁽⁴²⁾

ただし、スロヴァキア・ネーション党やフラス派に属するナシヨナリストたちは、カトリック人民党の台頭を必ずしも否定的に捉えていたわけではなかつた。人民党は当初、地方行政における言語的少数派住民の言語的権利の保障を定めた一八六八年の「ナシヨナリティ法」(注2参照)の実効化を政策プログラムに取り入れており、それによりスロヴァキア・ナシヨナリストの支持をも獲得していっ

た。一八九六年の王国議会選挙において、なお選挙ボイコット戦術をとっていたスロヴァキア・ネーション党は、カトリック人民党の政策プログラムの一部（教会関連法の見直し、「ナシヨナリティ法」の実効化、財産資格に基づく選挙制度の見直し）を両者共通の要求であるとみなし、一部の選挙区において人民党の候補を非公式に支持する決定を行った。⁽⁴³⁾

そして、カトリック人民党に属する聖職者の中にも、スロヴァキア・ナシヨナリズム運動に傾倒する者が存在した。なかでもとくに重要なのは、スロヴァキア語新聞『カトリック・ノヴィニ』*Katolícke noviny*の編集を担当したF・ユリガとF・イエフリチュカ、そして大戦間期のチェコスロヴァキア共和国においてスロヴァキア自治要求運動を主導することになる、A・フリンカである。かれらは当初、カトリック人民党の活動家として、協同組合の設立や同党の選挙運動に携わっていた。フリンカは、一八九八年の王国議会議員補欠選挙に人民党の候補として出馬し、自由党候補に敗れている。⁽⁴⁴⁾ところがカトリック人民党は、一九〇一年以降強硬なマジヤール・ナシヨナリズムを掲げる反政府党、独立党*Függetlenség és Negyvennyolcas Part*との協力関係に入り、その結果自らの政策プログラムから「ナシヨナリティ法」の実効化という項目を除外し

てしまった。⁽⁴⁵⁾これに不満を持つユリガやイエフリチュカから同党内のスロヴァキア・ナシヨナリストは、『カトリック・ノヴィニ』を通じて、言語的権利の擁護を中心とする自らの主張を展開していった。

かれらカトリック系ナシヨナリストは、上述の社会的カトリシズムに基づき、消費協同組合や信用組合の設立・運営といった社会活動を重視していた。この点においてかれらの方向性はフランス派のそれと同様であり、ユリガなどはフランス派、とくにブラホに共感していた。⁽⁴⁶⁾その一方でかれらの中には、ヴァヤンスキーと同様、フランス派をマサリク流の世俗主義（「トルストイ主義」と呼ばれた）や近代主義の名のもとに批判する向きもあった。たとえばイエフリチュカは、一九〇三年の『近代哲学とスロヴァキア人』*Novonka filozofia a Slováci*と題する著作の中で、「『フランス』は我々のもとに、マサリクによって形づくられた近代的リアリズムを輸入しようとしている。マサリクは「偶像を破壊する」ためにチェコに赴いたと称しているが、我々のもとでも、彼のエピゴネンたちが同じことを望んでいる」と述べ、マサリクとフランス派の反宗教性を非難している。⁽⁴⁷⁾

加えて、聖職者を中心とするカトリック系ナシヨナリストには、フランス派のみならずスロヴァキア・ネーション党

とも大きく異なる点が存在した。すなわち、かれらの掲げたナショナルな要求は、必ずしもシトウル派以来のナショナリズム思想——言語・文化的ネーションを基盤とした政治的ネーションの確立——に基づくものではなかったのである。たしかに、かれらの要求の中心は、従来のナショナリズム運動と同じくスロヴァキア系住民の言語的権利の擁護にあつた。しかしその理由は、多分に宗教的動機に基づくものであつた。たとえば、『カトリック・ノヴィニ』一九〇五年度版第八号に掲載された「言語の問題・宗教の問題」と題する論説には、以下の記述が見える。

(…) 学校では今日、母語が非常に蔑ろにされており、それゆえスロヴァキア語を使いこなせなくなった子どもたちは、「教会において」スロヴァキア語で説かれる高度な宗教的眞実を理解し、修得することができなくなるだろう。子どもたちの母語を抑圧する者は、かれらの精神をも傷つけ、かれらの宗教的發展を妨げる者でもある。そのことから我々は、言語の問題は、今日ではまさに宗教的問題であることを見出すのである。⁽⁴⁸⁾

ここでは、教育の「マジヤール化」を否定し、スロヴァキ

ア語教育の維持を要求する理由として、教会において聖職者がスロヴァキア語で行う説教を、若い信徒が理解できなくなることへの危惧が表明されている。すなわち、カトリック系ナショナリストにとって重要であつたのは、将来的な自治獲得といった政治的目標や、スロヴァキア・ネーションの精神文化的実在性といった観念的議論ではなく、教会における宗教的実践や聖職者と信徒との関係に関わる問題であつたと見なしうるのである。

いずれにしても、民衆志向を掲げながらも実質的には少数の知識人グループにとどまつたスロヴァキア・ネーション党やフランス派と異なり、農民を対象とした日常的な社会活動に実際に従事し、また在地の聖職者として信徒に少なからぬ影響力を及ぼしえたカトリック系ナショナリストは、ナショナリズム運動への民衆層の動員というシトウル派以来の念願を実現する可能性を有していた。そしてそのことは、スロヴァキア・ナショナリズム勢力が大きく伸長した一九〇六年の王国議会選挙（後述）において、ある程度実証されることとなる。

カトリック系ナショナリストは、上に述べたようなイデオロギーや問題意識における相違にもかかわらず、実際的な政治活動の場においては、フランス派やスロヴァキア・ネーション党との協力関係を築いていった。フランス派の方

では、上述のホジヤの例にも見られるように、カトリック系ナシヨナリストの動員力に注目していた。またカトリック系ナシヨナリストは、次第に進展しつつある「マジヤール化」に対抗するために、カトリシズムの枠を超えて福音派や世俗主義者など幅広いスロヴァキア・ナシヨナリズム勢力を結集させる必要性にせまられていた。こうしたことから、『フラス』が終刊し、またユリガとイエフリチュカが『カトリック・ノヴィニ』の編集を引き継いだ一九〇四年以降、かつてのフラス派とカトリック系ナシヨナリストの提携に向けた動きが加速していった。その中心となったのは、一九〇五年一月の王国議会選挙でヴォイヴォディナ（ハンガリー王国南部）のスロヴァキア系住民居住区から立候補し当選していたホジヤと、カトリック人民党所属の王国議会議員F・スキチャークであった。そして、一九〇五年末にスキチャークがカトリック人民党の会派を離脱したのを直接の契機として、ホジヤ、シロパール、ブラホら旧フラス派と、スキチャーク、ユリガ、イエフリチュカ、そしてフリンからカトリック系ナシヨナリストが中心となり、スロヴァキア人民党 Slovenská ľudová strana が結成された。その設立宣言書では、スロヴァキア人民党はスロヴァキア・ネーションのための党であり、スロヴァキア人の利害を代表するという目的のため設立されたこと、

またカトリック信徒だけでなく、「すべての情熱的なキリスト教徒」、すなわち福音派を含めたスロヴァキア・ナシヨナリストの党であることが明記された。⁴⁹

新たに設立されたスロヴァキア人民党は、翌一九〇六年四月に再度実施された王国議会選挙に参加し、一三名の候補を立てた。選挙の結果、スロヴァキア人民党からホジヤ、ブラホ、スキチャーク、ユリガ、イエフリチュカ、M・コラールの六名、また王国議会選挙に再び参加していたスロヴァキア・ネーション党から一名が当選し、王国議会下院におけるスロヴァキア・ナシヨナリズム勢力の議員数は過去最多の七名となった。これは、ハンガリー全体の王国議会議員数からすればごく少数であるが、一九〇一年の王国議会選挙におけるスロヴァキア・ナシヨナリストの当選者四名、一九〇五年選挙の二名と比較すれば、大きな前進であった。スロヴァキア人民党の当選者のうち、ヴォイヴォディナの選挙区から出馬し現地のセルビア系選挙人の協力を得ることが可能であったホジヤと、上述のように協同組合活動へのコミットによって農村民の支持を獲得していたブラホを除く四名は、カトリック系ナシヨナリストであった。また、ルジヨムベロク選挙区から出馬したものの僅差でカトリック人民党候補に敗北したシロパールの選挙運動を主導したのは、ルジヨムベロク司祭となっていた

フリンカであった。⁵⁰ こうしたことからも、一部の選挙民にたいするカトリック系ナショナリストの影響力の大きさが、一九〇六年選挙におけるスロヴァキア・ナショナリズム勢力伸長の要因として他に勝っていた可能性は、否定できないのである。

おわりに

以上に見てきたように、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてスロヴァキア・ナショナリズム運動内に存在した諸グループ——スロヴァキア・ネーション党、フラス派、そしてカトリック系ナショナリストの掲げていたナショナリズム理念や運動の方向性には、それぞれ相違する部分と共通する部分が混在していた。ただし、とりわけ一九〇五年のスロヴァキア人民党設立に見られるように、実際の政治活動の場においては、それらのグループは互いに連携を試みた。一九〇六年の王国議会選挙におけるスロヴァキア・ナショナリズム勢力の伸長は、その成果の表れともいえるが、そこではとくにカトリック系ナショナリストの果たした役割が大きかった。

しかしこの後の展開は、それまでとは異なる様相を見せる。一九〇六年選挙の後、フリンカ、シロバール、ユリガ

らが騒乱罪等の名目で国家当局に逮捕され、またイエフリチュカは運動を離脱し、スロヴァキア・ナショナリズム勢力は弱体化する。加えて一九一一年以降、かつてのフラス派とカトリック系ナショナリスト、とりわけシロバールとフリンカが深刻な対立に陥った。その結果、スロヴァキア人民党は福音派や世俗主義者を排除しカトリック系ナショナリストのみを糾合する形で、一九一三年に再組織される。以後、同党は宗派色を鮮明にし、カトリック保守主義をイデオロギー的基盤とするスロヴァキア・ナショナリズムの政党として、大戦間期のチェコスロヴァキア共和国におけるスロヴァキア自治要求運動の中心となっていく。一方のシロバールやホジャら旧フラス派は、共和国初代大統領となったマサリクとの緊密な関係のもと、閣僚として中央政界で活躍していくこととなる。またスロヴァキア・ネーション党は、スロヴァキアにおいては少数派である福音派を代表する政党として、大戦間期も存続していく。

こうして見るならば、スロヴァキア・ナショナリズム運動の諸潮流間のイデオロギー上の相違、とりわけ宗教に関わる対立は、結局克服されぬまま大戦間期に引き継がれたといえる。この問題をさらに論ずるにあたっては、ナショナル・アイデンティティと宗派的アイデンティティの関係性についてのより立ち入った考察が必要とされるのである。

が、それについては今後の課題としたい。

註

- (1) マジャール (ハンガリー) 語においては、言語的エスニシティとしての「マジャール人」およびハンガリー王国民としての「ハンガリー人」を指す語はともに *magyar* であり、両者の間に区別はない。Majtán, M., "Slová Uhora Maďar v staršej slovenčine", in: Barna A. (ed.), *Maďarsko-slovenské terminologické otázky*, Ostrihom, 2008, s. 41-46.
- (2) 二重制成立直後の一八六八年に出された法律四四号「いわゆる「ナショナルリテイ法」は、「ハンガリー＝マジャール・ネーション」の単一不可分性の原則を確認し、マジャール語の国家語としての地位を法的に規定した。その一方で同法は、自治体行政や初等教育における使用言語について当該地域住民の意向を尊重する条項を含み、王国内の言語的少数派にも配慮する内容となっていた。しかし一九世紀末までには、「ナショナルリテイ法」の上記条項は形骸化し、とくに初等教育における「マジャール化」が強力に推進されていく傾向にあった。教育の「マジャール化」については、渡邊昭子「国立小学校とハンガリー化―母語の国民化をめぐる―」『歴史学研究』第七九九号、二〇〇五年、二二―三八頁。
- (3) これらの研究文献のうち、以下では主要なものを挙げる。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのスロヴァキ

ア・ナショナルリズム運動の概観としては、Butvin, J., "Slovenské národnopolitické hnutie v rokoch 1890-1898", *Historický časopis* 31 (1983), č. 2, s. 181-203; Butvin, J., "Slovenské národnopolitické hnutie na prelome 19. a 20. storocia", *Československý časopis historický* 31 (1983), č. 5, s. 689-710; Kováč, D. (ed.), *Na začiatku 20. storocia 1900-1914*, Bratislava, 2004. 一九世紀後半におけるスロヴァキア・ネーション党の動向に関する基本的文献としては、Podrimavský, M., *Slovenská národná strana v druhej Podrimavský, M., Slovenská národná strana v druhej polovici 19. Storocia*, Bratislava, 1983. スロヴァキア・ネーション党のイデオロギーの指導者であったヴァヤンスキーのナショナルリズム思想については、Podrimavský, M., "S. H. Vajanský a štúrovská koncepcia národnej svojbytnosti", *Studia Academica Slovaca* 25 (1996), s. 171-176; Balážová, J., "Národnoobraná koncepcia konzervatívyca S. H. Vajanského", *Filozofia* 57 (2002), č. 9, s. 613-62. フランス派については、Butvin, J., "Hlasisti, vznik klerikálneho a maloagrárneho hnutia v rokoch 1898-1904", *Historický časopis*, 31 (1983), č. 5, s. 727-747; Klobucký, R., *Hlasistické hnutie: národ a sociológia*, Bratislava, 2006. よく知られたスロヴァキア・ネーション党やフランス派との「ナショナルリズム思想をめぐる対立については」Podrimavský, M., "Kollárovská a štúrovská koncepcia národného vývinu v ideovom spore medzi hlasistami a vedením Slovenskej národnej strany", *Historický časopis* 22 (1974), č. 4, s. 565-573. カトリック系

- のナシヨナリストにひびきは、Letz, R., Mulik, P. (eds.), *Pohlady na osobnosť Andreja Hlinku*, Martin, 2009; Pekník, M. (ed.), *Ferdinand Juriga: ľudový smer slovenskej politiky*, Bratislava, 2009. 以下は、これら諸潮流の思想・理念の比較分析と、Potemra, M., “Rozvoj spoločenského myslenia na Slovensku na Začiatku 20. Storočia”, *Historický časopis* 29 (1981), č. 3, s. 329-372; Bakos, V., *Kapitoly z dejín slovenského myslenia*, Bratislava, 1995.
- (4) シトウル派の思想および活動については、中澤達哉『近代スロヴァキア国民形成思想史研究—「歴史なき民」の近代国民法人説—』、刀水書房、二〇〇九年、第三—七章を参照。
- (5) 『スロヴァキア・ネーションのメモランダム』については、拙稿「マチツァ・スロヴェンスカーの理念と実践—スロヴァキア国民形成運動におけるその位置づけ—」『東欧史研究』第二九号、二〇〇七年、二二—二五頁。
- (6) 『ナエロニエ・ノヴァニ』の発行部数は、二〇世紀初頭の時点で六〇〇部程度であった。Na začiatku 20. storočia 1900-1914, s. 245.
- (7) Podrimavský, *Slovenská národná strana v druhej polovici 19. Storočia*, s. 62-73.
- (8) “Osvedčenie” *Národné noviny* (以下 NN), roč. 15 (1884), č. 65. In: *Dokumenty k slovenskému národnému hnutiu rokov 1848-1914* (以下 DSNH) II, Bratislava, 1965, s. 479-481.
- (9) その例として、北部ハンガリーに三校存在したスロヴァキア語ギムナジウムが一八七四年に政府命令によって閉鎖された。また、一八六三年に設立され約一〇〇〇名会員を擁したスロヴァキア系啓蒙文化団体マチツァ・スロヴェンスカー Matica slovenská も、一八七五年に強制的に解散をせられた。
- (10) “Narodnia politika”, NN, roč. 15, č. 75. In: DSNH II, s. 481-483.
- (11) Balážová, op. cit., s. 614-615.
- (12) Vajanský, S. H., “Literatúra a národ”, NN, roč. 13 (1882), č. 49. In: Vajanský, *Literatúra a národ. Kritiky a články*, Bratislava, 1989, s. 196. 以下に見られる národnosť とは、語は、一般的にはハンガリーの言語的少数派、すなわち非マジヤール系住民を指す言葉として用いられることが多い。しかしヴァヤンスキーはこの語に、ある住民集団が「ネーション」となるために必要な条件という意味を与えている。
- (13) Vajanský, “Umenie a národnosť”, NN, roč. 13, č. 56. In: *Literatúra a národ*, s. 204-209.
- (14) Vajanský, *Náklady a výhľady*, Turčiansky sv. Martin, 1897, s. 8-12.
- (15) *Ibid.*, 67-68.
- (16) Balážová, op. cit., s. 616-617.
- (17) 中欧におけるパン・スラヴ主義の唱導者として著名な J・コラールは、スロヴァキア系の福音派聖職者であっ

た。コラールは、一八三六・三七年にチェコ語とドイツ語で発表された「スラヴの諸種族と諸方言間の相互交流について」*O literarnej vzájemnosti mezi kmeny a nářečimi slavskými*と題する論文において、「スラヴ相互交流」の理念を定式化した。そこでは、スラヴ人は言語的特徴にもとづき、ロシア・イリリア・ポーランド・チェコスロヴァキアという四つの「種族」に分かれるが、それらは国家的枠組みを超えた単一の「スラヴ・ネーション」を構成している。これら各種族の知識人が互いの言葉を理解しあい、知的・文化的な交流を促進することで、スラヴ固有の精神文化を保存し発展させていくことが可能になるとされた。長興進「ヤーン・コラールの〈スラヴ相互交流〉理念について」『ヨーロッパ文学研究』第三〇号、一九八一年、一〇四—一六頁。

- (18) Bakoš, *Kapitoly z dejin slovenskeho myslenia*, s. 119-120.
- (19) シロバールはチェコスロバキア建国直後にスロヴァキア行政担当相、ホジヤは農業相などを歴任したのち一九三五年から共和国首相、フラス派の社会学者であったA・シテファーネクは一九二九年から教育文化相をそれぞれ務めている。
- (20) Bakoš, *op. cit.*, s. 120-121. マサリクは、M・ポゴーチンやN・ダニレーフスキーに代表されるロシアのパン・スラヴ主義について批判的な立場をとっていた。マサリクによれば、ロシアのパン・スラヴ主義は実際には「パン・ロシア主義」であり、正教徒のスラヴ人の結合のみを視野に入

れたものであった。T・G・マサリク『ロシアとヨーロッパ』I、石川達夫訳、成文社、二〇〇二年、二四二頁。

- (21) Vajanský, s. 202.
- (22) Bakoš, *op. cit.*, s. 121.
- (23) Šrobár, V., "T. G. Masaryk a Slováci", in: Rudinský, J. (ed.), *Slovensko Masarykovi*, Praha, 1930, s. 91.
- (24) *Ibid.*, s. 94-95.
- (25) ブラホはシロバールと異なりマサリクの直接的な影響下になく、シロバールのチェコ・スロヴァキア協調主義や近代合理主義に基づく宗教軽視に批判的であった。Butvin, "Hlasisti, vznik klerikálneho a maloagrárneho hnutia v rokoch 1898-1904", s. 736.
- (26) Šrobár, "Náše snahy", *Hlas*, roč. 1 (1898), č. 1, s. 5.
- (27) *Ibid.*, s. 6.
- (28) Blaho, P., "Mládež a drobná práca", *Hlas*, roč. 1, č. 11, s. 321-326.
- (29) *Ibid.*, s. 326.
- (30) Butvin, *op. cit.*, s. 736.
- (31) Klobucký, *Hlasistické hnutie: národ a sociológia*, s. 94-105.
- (32) *Ibid.*, s. 99.
- (33) Pasiar, Š., Paška, P., *Osveta na Slovensku. Jej vznik, počiatky a vývoj*, Bratislava, 1964, s. 190.
- (34) Butvin, "Slovenské národnopolitické hnutie v rokoch 1890-1898", s. 184.

- (35) Klobucký, *op. cit.*, s. 48.
- (36) Ruttkay, F., *Dejiny slovenského novinarstva do roku 1918*, 1999, Trnava, s. 191.
- (37) ブラホが地元のカトリック聖職者の協力を得て一九〇三年に設立したスカリツァの製乳協同組合は、初年度に二一〇〇〇クローネ以上の純利益をあげ、一九〇五年には会員三四〇名を数えた。Holec, R. (ed.), *150 rokov slovenského družstevníctva. Viazstvá a prehry*. Bratislava, 1995, s. 60-61.
- (38) カトリック人民党の成立とスロヴァキア・ナショナルリズム運動との関わりについて、Popély, J., "Zichyho strana a nacionálno-kerikálne hnutie na Slovensku v rokoch 1895-1905", *Historický časopis* 26 (1978), 4, s. 581-609 を参照。
- (39) 『ヘルム・ノヴァールム』について、増田正勝「労働者問題とドイツ・カトリシズム：レオー三世『ヘルム・ノヴァールム』一〇〇周年に寄せて」『山口経済学雑誌』四二号、一九九四年、第三・四冊、二六七―二九九頁を参照。
- (40) Popély, *op. cit.*, s. 591-603.
- (41) Holec, R., *Poľnohospodárstvo na Slovensku v poslednej tretine 19. Storočia*, Bratislava, 1991, s. 162-163.
- (42) Hodža, M., "Nacionalizmus je slepý, slepý, slepý", *Hlas*, roč. 5 (1903), č. 5, s. 207-08.
- (43) Butvin, *op. cit.*, s. 192-196.
- (44) *Pohľady na osobnosť Andreja Hlinku*, s. 85.
- (45) *Ibid.*, s. 87.
- (46) *Ferdinand Juriga: ľudový smer slovenskej politiky*, s. 62.
- (47) Margin (Jehlička, F.), *Novoveká filozofia a Slováci*, Martin, 1903, s. 4.
- (48) "Otázka reči : otázka náboženstva", *Katolícke noviny*, roč. 56 (1905), č. 8.
- (49) "Nech žije slovenská ľudová strana!", *Katolícke noviny*, roč. 56, č. 51.
- (50) *Pohľady na osobnosť Andreja Hlinku*, s. 90.